



女性医師支援センター便り

医学生・研修医支援セミナーが開催されました

様々な角度から、実際に女性が、医師としての臨床・研究・教育といったキャリア形成という柱と、出産・子育て・さらには介護といった、女性に比重がかかりがちなライフイベントという二つの柱をどのように同時並走させていくかというのは、永遠のテーマであります。この度の「第4回医学生・研修医支援セミナー」は、前回よりのシリーズで「私がこの科を選んだ理由」と題して、9月5日（水）午後6時半より、長陵会館で開催されました。

医師としてのキャリア形成と家庭の両立をどのように実際行っているのか、仕事と家庭の両立可否における各診療科の特性、また、本人の周囲環境（実家がそばにあるなど）などの属性を考えながら、各診療科の女性医師に、各診療科のロールモデルとしてご登場をいただいております。

前回は、昨秋で、消化器外科、大腸肛門外科、皮膚科の先生にご登場いただき、今回は、産婦人科、呼吸器内科、精神科の先生方にご講演いただきました。参加者は33名で、そのうち、学生・研修医は16名でした。

林みづ穂先生（精神科医、仙台市精神保健福祉総合センター所長）は、「求められるもの、叶えるもの～精神科医として、震災後支援者として～」と題して、ご自分の生い立ち（幼児、児童、中学・高校・大学生）を軸に、精神科を選択した経緯、また、現在の仙台市精神保健福祉総合センターのご紹介、センター内および所長としての仕事内容、現在従事なさっている東日本大震災後のメンタルケア（震災直後の急性ストレス反応への対応から、震災から18カ月後のこころのケアへの取り組み）についてご紹介くださいました。柿坂はるか先生（産婦人科医、東北公済病院）は、外科と内科的要素という二面性をもつ産婦人科の魅力、具体的な産婦人科医となつての手術内容も含めた仕事内容に加え、卒後10年から14年の女性産婦人科医10人にアンケートを行い、現在置かれている立場とともに、特に、産婦人科学分野内でどういった分野を自分の専門にしたいのかという希望調査結果の発表をなさいました。玉井ときわ先生（呼吸器内科医、東北大学病院）は呼吸器内科を選択しようとした経緯、呼吸器内科の守備範囲、大学病院呼吸器内科に子持ち女医として入局したらどのような医局生活になるのか、大学院生に対する臨床・研究指導システム、取得可能な専門医、さらに二人の子供を育てながら、間もなく三人目を迎えるご自分の一日のタイムスケジュールなど、より具体的に発表しました。

これまで、同テーマでは二回、その他女性医師支援セミナーも加えると10回位に及びますが、多様な世代の女性医師が、自分の専門・医局の紹介、あるいは、現在の自分のプライベート生活をご紹介いただくことで、医学生および研修医は数年先の将来、あるいは10年、20年先、30年先の自分を描くことがで

NO PHOTO

きると思われま。会場よりの質問にありましたが、子持ち女性医師として勤務の必須条件である保育園情報など諸々の情報入手について、東北大学病院HPおよび宮城県女性医師支援センターHPに詳細情報を掲載されている旨を伝達しましたが、まだまだ広く認知されていないこと、宣伝不足を反省しました。

最後になりますが、最近、米国国務長官補佐として活躍した、スローター氏が、2011年に、子育てのために辞職をし、話題になっております。スローター氏は、「現在の米国でキャリアと家庭の両立は難しい」という主旨の論文発表も行っており、私共にとっては、「諸々の条件が揃っている米国においてでさえ、キャリア形成と家庭の両立は不可能」という最終結論がでたように打ちのめされる気分ですが、分析勉強するいい好機ととらえ、更なる工夫と努力をしていきましょう。

どうぞ宮城県女性医師支援センター <http://www.miyagi.med.or.jp/woman/> にアクセスしてください。



宮城県女性医師支援センター委員
東北大学加齢医学研究所老年医学研究分野
海老原 孝 枝

